

# 薬剤耐性をつくらないために

## 診察医へのお願い

### 抗菌薬を大切に使うために医療従事者がすべきこと

- まずは細菌感染症であるかどうかを十分に吟味する。
- 細菌感染症であっても、抗菌薬が必要な細菌感染症かどうか十分に吟味する。
- 病原微生物を可能な限り突き詰めて、狭域なスペクトラムの抗菌薬を選択する。
- 抗菌薬の投与を始める時には投与期間をあらかじめ設定しておく。ダラダラと続けない。
- 小児の発熱、初診時は基本的に抗菌薬を投与しない。

参考資料：国立国際医療研究センター病院 忽那賢志先生 HAICS キャリアディベロップメント講座

### 身近な感染症への対応(一例)

(参) 厚労省抗微生物薬適正使用の手引き  
第1版ダイジェスト版

#### 1) 急性気道感染症

- ①感冒…発熱の有無を問わず、鼻症状・咽頭症状・下気道症状が「同時」「同程度」が存在する病態  
⇒ 抗菌薬投与を行わないことを推奨
- ②急性鼻副鼻腔炎…発熱の有無を問わず、くしゃみ・鼻汁・鼻閉を主症状とする病態  
⇒ 成人では、軽症の場合は、抗菌薬投与を行わないことを推奨し、中等症又は重症の場合のみアモキシシリン水和物投与を検討することを推奨

#### 2) 急性下痢症…急性発症(発症から2週間以内)で、普段の排便回数よりも軟便または水様便が1日に3回以上増加している状態

- ⇒ 水分摂取を励行した上で、基本的には対症療法のみを行うことを推奨

### 「適切な診断」と「正しい抗菌薬使用」で“薬剤耐性対策”



※抗菌薬使用は必要な疾患に限定し、ウイルス感染症には抗菌薬を使用しない。  
※抗菌薬不要と判断した際は、理由と対症療法等を理解が得られるよう説明する。  
【例】「ウイルスによるものなので抗菌薬は効果なし。休養が重要」「抗菌薬の使用は、腸内の善玉菌を殺す可能性がある」「糖分・塩分の入った水分補給が重要」等

※抗微生物薬適正使用の手引き第1版 ダイジェスト版  
(急性気道感染症、急性下痢症の診断・治療手順掲載)

